

★ ピンクは着ないの

91/5/28 衣替えです

5月だというのに、まるで夏のように暑い日が続き、早々と夏物を取り出した。耕平が去年まで着ていたサーモンピンクのタンクトップ、まだ十分着られる・・・

耕平の衣類は、1/2がかおるのお古、残り半分が保育園のバザーで仕入れたものと新品という構成。かおるは女の子だが、保育園で遊ぶのに具合が良いといつでもTシャツとショートパンツ。かおるが着られなくなった頃、2歳下の耕平にちょうどよくなるので我が家の家計には実に都合がよい。

耕平の身体に合わせ大きさを確かめていたら、「ボクこれ着たくない。おんなの色だもん」と口をとがらせる。「おんな?」「うん、ボクおとこだもん。」「おとこでもピンク着ていいのよ。」「ちがうの。ピンクはおんなの色。」へえー、耕平は「おとこ」でありたいわけね。

そう言えば近ごろ、「おいヨウハイ、オレと〇〇やろうぜ」といったような、男っぽい言葉がふえてきて、義母や義妹から、「こうちゃん、男の子らしくなってきたね」などと言われるようになっていた。

耕平3歳5か月。しかし、3歳になって急に男の子になるわけじゃない。単なる「性別」でいうなら、耕平は生まれたときから男の子である。1歳の時にはかおるのひらひらしたワンピースを着たがった（その時の写真もある）し、去年まではかおるのお古の赤やピンクのシャツを着ていて、「あいちゃん（保育園の同じクラスのお友達、女の子）、いっしょにあそぼ」なんてかわいらしく言っていた。

それが今年・・・何が耕平を「男の子」にしたのだろうか。



ワンピースを着た耕平（1歳）



男の子になった頃の耕平（3歳）

「男の子らしく」となるというのはいったいどういうことなのか。

「男の子らしく」なっていきたいということが成立するためには、どういう条件が整っていないといけないのか。

1. 「おんな」と「おとこ」があるということがわかっている。
2. 自分が「おとこ」に属しているということが自覚できている。
3. 男の子、女の子それぞれの傾向（服装、ヘアスタイル、言葉遣いなど）がとらえられるようになって

ている。

4. 男の子でありたいと思っている。または男の子の仲間に入っていたいと思っている。

つまり、「比較して違いをとらえる力」「類型としてまとめる力」がついてきたということだし、「仲間」という意識が芽生えてきたということではないか。「男の子」らしくなってきたということを楽しむことよりも、親として見るべきは、このところだろう。

それにしても、子どもが、単なる子どもではなく「男の子」になる。これは、いつ、どこで、何によってなるのか。大人は、男と女のちがいはまずは形のちがいだとみる。つまり肉体的な違い、外見のちがいである。ところが、小さな子どもの場合、それはあまり意識されない。お父さんとお母さんであって、男の人と女の人ではないのである。かおると耕平は、お姉ちゃんと弟、愛ちゃんと耕平は、保育園のお友達の「あいちゃん」と「こうちゃん」であって女の子と男の子ではないのである。一人一人を見ているのであって、類型化しないのである。

類型化というのは、いろいろな形態・性質をもったたくさんものものについて、一つ一つバラバラに見るのではなく、おなじ形態・性質をみつけて分類するということである。保育園に通うようになって1年と少し。いつも一緒に遊ぶ同じクラスのお友達は20人もいる（保育園全体は90人ぐらい）し、先生も園長先生ご夫妻、お帰りの時間頃を担当する補助の先生を含めると20人はいる。それだけ大勢の人に接して、見る目も育つわけだろう。

年齢的な成長もある。保育園の先生によれば、2歳児までは、ほとんど一人遊び。すぐそばにいても一緒に遊ばない。関わりができるとすれば、オモチャの取り合いくらいなものだという。その子にではなく、持っているオモチャの方に関心があるということだ。それが3歳ぐらいになると、だんだん周囲に関心が向かい、一緒に遊ぶようになるという。

保育園では、食事の前や、散歩に行く前、お昼寝の前などに排泄を習慣づけている。男の子は男の子用の便器を使う。そうした時々で、身体の性の特性について自覚できるし、自分がどの分類にいるかも理解できる。日々、女の子、男の子が意識されるような環境が整っているというわけだ。

そうした環境の中で生活し、周囲の人たちが持っている分類のしかた、考え方に接し、それで、そういうものの見方が育ってきたということなんだろうね。言われているんだろうな、「男なんだから泣いちゃいけないよ」とか「男の子は女の子にやさしくしくちゃいけないよ」とか・・・ね。

そうして君は「男の子」になったんだね、こうちゃん。

でもね、こうちゃん、ピンクが好きなら男の子だって着ていいんだよ。

「子育て日記プラス」より

“プラス”は、子育て中の出来事について、あとで一步引いて考えたり観察したりしたことを追加したという意味でつけたものです。

核家族の我が家、子育て中は試行錯誤の毎日でした。しかし、今あらためて日記を読み返してみると、結構そのことを楽しんでいた自分がいました。自分自身の目を育てた年月だったと感じています。

(やぐちみどり)